

「地理的な離島はあっても、人の命に離島があってはならない」

千葉県立東金病院 内科医長 古垣斉拡

第 1 回 ; 離島医療との出会い

【はじめに】

本連載では12回シリーズで離島診療所の医療活動と医師養成について報告いたします。地域医療の危機といわれる中で、本連載を通して離島・へき地医療の現状を多くの方にお伝えし、今後の地域医療を担う医師の養成や対策などを検討していただけると幸いです。また離島・へき地医療の厳しさ・楽しさ(医療人としての成長および充実)をお伝えしたいと考えます。

【離島医療との出会い】

鹿児島県・奄美大島は鹿児島県本土から約380km南西に位置しており、鹿児島市からフェリーで約12時間かかります(飛行機で約50分です)。鹿児島県民医療機関連合会(以下、民医連と略す)では医学生・看護学生に離島医療に触れてもらおうと、毎年夏に「離島フィールド」を行っています。1996年夏、鹿児島大学医学部3回生であった筆者は奄美大島を訪れ、初めて離島医療の現場に触れました。フェリーで奄美市に到着して(船酔いをする者が続出)、島の医療の歴史、文化、風土について学びました。また奄美市から車で約1時間30分かけて南下し、瀬戸内町にある南大島診療所を訪問しました。当時はまだ交通事情が整っておらず、急峻な山道をバスに揺られながら瀬戸内町に到着しました(車酔いをする者が続出)。診療所には卒後4-5年目の若手医師2人が所長・副所長として勤務していました。「地理的な離島はあっても、人の命に離島があってはならない」というスローガンの元、恵まれぬ離島環境の中で診療所の若手医師やスタッフが奮闘している姿に深い感銘を受けました。ぜひ離島で医師として仕事をしたいと決意したのを覚えています。それからちょうど10年後に南大島診療所に所長として勤務しました。

【離島診療所の医療・福祉環境】

南大島診療所は1961年（昭和36年）8月6日に開設され、今年で46年の歴史があります。当診療所は鹿児島民医連に加盟し、奄美医療生活協同組合に属する19床の有床診療所です。

当診療所は奄美大島北部にある奄美空港から車でおよそ2時間かけて南下した鹿児島県大島郡瀬戸内町にあります(図1)。瀬戸内町は奄美大島南端に位置しますが、加計呂麻島・請島・与路島など離島の中の離島を抱えており、人口は約1万人です(奄美群島全体の人口は約13万人)。町内では高齢化が年々進行しており、高齢化率32.7%です(2006年8月)。さらに瀬戸内町は生活保護率が奄美群島で最も高くなっており、保護率が68.0%です。ちなみに2005年度の全国平均保護率11.7%、鹿児島県の保護率14.3%、奄美群島の保護率42.2%です(単位はパーミル、人口千人あたりの数)。その背景としては、経済的基盤の弱さからくる若年者の人口流出と、鹿児島県の中でも進行の速い高齢化や高い離婚率等の社会的要因、奄美の基幹産業といわれる大島紬の低迷による所得の減少等の経済的要因が挙げられています。

当診療所の保険別・外来患者割合では国保60%、社保25%、生保15%の比率であり、生保の患者さんの占める割合が異常に高くなっています。瀬戸内町内の他の医療機関としては民間病院(内科・外科60床)、瀬戸内町立診療所(内科19床)、民間の医院(整形外科19床)、精神科の民間病院(212床)が主な連携機関となっています。町内には常勤医師約10名がおり、人口1000人あたり医師1名となっています。

【離島の重装備診療所と医師体制】

当診療所では常勤医師2名、正規職員15名(事務・看護師・臨床検査技師・放射線技師・管理栄養士)、非正規職員8名、計25名で診療所活動を行っています。2004年7月に現在の場所に新築移転して19床であり、外来では電子カルテが稼動しています。単純X線(月間平均192.5件)、ヘリカルCT(月間平均137.5件)、上部消化管内視鏡検査(月間平均20.7件)、超音波検査(月間平均82件)等の各医療装置を備えています。放射線技師が不在の時には医師が単純X線・ヘリカルCTを撮ることもあります。さらにレスピレーターを病棟で使用することもあり、離島におけるまさに「小さな病院」です。

また当診療所に勤務する医師は鹿児島民医連に属しています。鹿児島民医連内の病院で初期・後期研修を終了した卒後4-6年目の若手医師が離島診療所

(当診療所及び徳之島診療所)を担っています。診療所には初年度を副所長、2年目を所長として勤務します。午前中は両医師共に外来診療を行い、午後は1人が訪問診療を行い、他方が外来診療を行います。病棟回診等は早朝と昼休み、夜間に行っています。さらに夜間は交互に宅直し、自宅で病棟対応や深夜の急患に備えています。まさに体力勝負の勤務体制です。

【外来診療と病棟管理】

外来診療は高齢者から乳幼児まで幅広い患者様が受診されています(約1-2割は小児です)。そのために診療所での勤務はプライマリ・ケア能力を磨くまたとない機会となります。2005年度の月平均外来件数1134.8件、1日平均外来件数78名です。急速な高齢化に伴い、糖尿病をはじめとする慢性疾患を有する高齢者が増加しています。慢性疾患管理や中断対策の診療所を挙げた取り組みを行っています。

瀬戸内町では人口約1万人に対して、医療の病床数が65床しかない状況にあり、高齢者も多いことから入院の需要は高くなっています。奄美大島の中心地奄美市までは車で約1時間かかるために、患者・家族も瀬戸内町内の病院あるいは診療所に入院を希望されることが多くなります。

また長年当診療所にかかっている患者さんの中にはぜひ当診療所に入院したいとの希望も強いようです。さらに当院は同じ法人内の老健施設「せとうち」の協力病院となっており、老健の入所者で入院加療が必要な場合は基本的に当院に入院されています。

病棟管理では common disease を中心に幅広い疾患群となっています。呼吸器(肺炎・気管支喘息等)、循環器(心不全・不整脈疾患等)、消化器(消化性潰瘍・細菌性腸炎・イレウス症等)、内分泌(糖尿病のインスリン導入等)が主な疾患群です。入院患者層は60才以上で約97%、特に75才以上の後期高齢者で約75%を占めています。平均在院日数2006年度16.1日(2005年度21.7日)、月入院患者件数45件、年間入院患者件数540件(いずれも2005年度)です。

【在宅医療と救急医療】

高齢化が進み、外来受診できなくなった患者様が在宅管理に移行することが多くなるので、管理件数も年々増加しています。2005年度の訪問診療管理・月間平均件数121.5件です。「患者様の自宅も我が病棟」の気概をもって在宅医療にも力を入れています。診療圏が広く、訪問診療に4-5時間かかる場合もあります。隣島の加計呂麻島には貸切船で訪問診療に出かけます(写真1)。

当診療所は救急医療に関しても特長のある診療所となっています。2003年度には救急搬入件数が年間129件となり、全日本民医連の有床診療所(23箇所)で第1位となっています。離島診療所では医療過疎のために救急車の搬入先の病院が少なく、診療所に搬入することが多くなっているのでしょうか。

また2003年度には当診療所への救急搬入件数が年間129件となり、全日本民医連の有床診療所(23箇所)で最多となりました。また2005年度には当院からの救急搬送件数が年間127件でした。内訳は約75件が鹿児島県立大島病院、約20件が奄美中央病院等です(いずれも奄美市にあります)。奄美市にある搬送先の病院まで約50分かかり、かつ急峻な山道を走るために同乗する看護師や医師の負担も増えます。さらに重症者の同乗は医師が行っており、急性心筋梗塞、脳出血、細菌性髄膜炎等の患者様を搬送しています。救急車内で急変することもありえるので、緊張しながら同乗することもしばしばあります。

【当番医制度と診療支援体制】

瀬戸内町では日曜祭日の当番医制度があります。当診療所、民間病院及び町立へき地診療所等が交代制で行っています。当番医制度は土曜午後から日曜終日の時間帯となります。当番医の際には加計呂麻島・請島・与路島などの離島を含めた瀬戸内町全体からの急患・救急車を基本的に受け入れることとなります。しばしば入院加療を必要とする場合もあるので、当番医の際にはベッドを空けておく必要があります。

また奄美市にある奄美中央病院から毎週診療支援を頂いています。循環器・消化器・呼吸器・外科の各専門医に各々月1回診療支援をして頂いています。その際には困難な事例などの相談にも乗っていただいています。その他、対応が困難な事例では地域医療連携を通して、鹿児島県立大島病院や他の院所などを利用することも多くなります。

漁船による訪問診療；月 1 回は隣島のかけるま島に貸切で漁船渡り、訪問診療を行っている。多忙な診療所勤務の中で、心休まる時間でもある。

